

『絵描き歌』で描けた！自分で描けた！！友だちのかお！！

鈴鹿市立合川小学校 教諭 勝井 まどか，鈴鹿市教育委員会事務局教育指導課 主幹 兼 指導主事 福島 耕平

キーワード：特別支援教育，絵描き歌，ロイロノート，iPad

実践の概要

特別支援学級在籍の2年生Sは、一人で絵を描くことが難しく、描きたいという興味もあまりない。そこで、顔を描く『絵描き歌』の動画教材を「ロイロノート」を用いて開発し実践した結果、『絵描き歌』を集中して視聴し、視聴後には自分から顔を描こうとする姿がみられた。

1. 背景と目的

今年度4月から担任している特別支援学級に在籍している2年生の児童Sは、発語が少し不明瞭で、「おはよう」や「ありがとう」等の挨拶はするが、意思表示を言葉で伝えてくることはあまり多くない。国語・算数以外の教科や学校生活は、通常学級（2年生）でおこなっている。

一斉での指示は通りにくいところがあるが、周りの友だちの行動を見真似て行動することができる。人の顔の認識はできていて、顔のパーツ（目や鼻等）を並べる顔パズルではパーツを正しく配置することができる。

しかし、紙に描く際は、顔形の丸を描いた後に、塗り潰してしまうことが多い。そのため、1年生のときは、教員がSの手をもって一緒に描いたり、教員の描いた下絵をSになぞらせたりして描いていた。

このようなSの現状は、発達段階の特徴であるといえるが、できるだけSが主体的に活動できること、Sらしさが出る作品であること、「Sが自分で「できた！」と達成感を味わえること、そしていずれ一人でも描けることを目指した支援の必要性を感じた。

Sは、対象物や手本を見て描くことは難しいが、活動（動作）を真似しようとする特性がある。そこで、図画工作科の『ポスター制作』において、ICTを活用してSが描き方を真似できるような支援ができないかと考えた。

本実践では、iPadを用いて作成した『絵描き歌』を活用した支援が、Sの支援として効果的であったか、実践を通して検討をおこなった。

2. 実践

2.1 内容

実践は、2019年7月におこなった。Sには、友だちや自分の顔を一人で描くことを目標に設定し、ポスターの構図は教員が考えた。Sが顔を一人で描くための支援として、教員が『絵描き歌』をロイロノートで作成した。『絵描き歌』の作成手順を図1に示す。

Sは、空間把握が苦手なため、画用紙の大きさに合わせた絵を描くことは難しい。そこで、Sは『絵描き歌』を視聴しながらA4用紙に顔を描き、描いたA4用紙を教員が画用紙の大きさに合うように拡大コピーし、カーボン紙で画用紙に複写した。複写した線をSがコンテでなぞり、絵の具で色塗りや背景に手形を押して作品を完成させた。

2.2 結果と考察

(1) 視覚的支援

『絵描き歌』を初めて視聴したSは、最後まで集中して視聴していた。また、描く際には、Sの描くペースに応じて、描き方を途中停止し、繰り返し再生した。

『絵描き歌』は、顔のパーツの1つずつの描き方が見える点、繰り返し再生できる点において、真似ができるSの支援として有効だと考える。

(2) 音声の支援

実際に描くとき（2回目の視聴）には、S自身が、「くーち、くーち、くちかくよ。」と、歌を口ずさみながら描く様子がみられた（写真1）。

視覚的な支援だけでなく、音声的な支援も同時に提供できる点は、ICTの特性である。

描きながら「シュッシュュッシュ。」のように様子を表現する言葉を入れることは、児童の対象物の概念を広げる意味で大切な支援要素であると考えられる。

(3) 教材のカスタマイズ

| | | | |
|---|---|---|---|
| <p>はーな はーな はな描くよ♪</p>  | <p>みーみ みーみ みみ描くよ♪</p>  | <p>髪の毛 髪の毛 髪の毛描くよ♪</p>  |  |
| <p>顔の輪郭、目、鼻など、1パーツ1動画で作成した。筆者は左手でiPadを持ち、歌いながら描く様子を上から動画撮影した。歌は即興で作った。歌には、顔のパーツ名を入れ、髪は「シュッシュュッシュ。」という擬音語をいれた。</p> | | | <p>描く順番に顔の各パーツをつなげて、1つの動画にした。</p> |

図1 ロイロノートを活用した『絵描き歌』作成手順



写真1 絵描き歌を見ながら顔を描く S

作成した『絵描き歌』は、1 パーツを1 動画ずつ分割して作成し、各動画をつなげて1つの動画にしている。

動画を入れ替えることで、あるパーツを繰り返し視聴できたり、今後、一人で描けるようになった時にパーツを抜いたりといったように、児童の実態に合わせてカスタマイズができる。

このように児童の実態に応じて簡単にカスタマイズ可能な点が、作成した『絵描き歌』の特徴の一つでもある。

3. 実践の成果

実践の成果として、以下の3点が挙げられる。

- 『絵描き歌』の初視聴では、大変興味をもって最後まで集中して視聴していた。初視聴直後、教員が「Sちゃんも描いてみる？」と聞くと、「うん！」とわずき、自分から鉛筆を出したことから、描きたいという意欲が見て取れた。『絵描き歌』を見ながら描く最中、「かーお、かーお、かおかくよ♪」と口ずさみながら描いていた。また、描いた後も、「できた！」と自分の言葉で満足そうに伝えてきた。以上のことから、描き方が見える視覚的支援と音やリズムによる音声的支援が有効であり、本人の満足感も引き出した。
- Sのポスターの下絵を見た2年生児童が、「Sちゃんじょうずだね。」と声をかけてきた。そこで、Sの支援学級での学習の様子を通常学級の児童が観ることで、Sのことをより深く理解したり、つながりが深まったりすると考え、『絵描き歌』を視聴しながら顔を描く Sの動画を2年生に見せた。動画を見た児童からは、「Sちゃん歌っとる!」「マネして描くんだ。」といった発言が聞かれた。Sが支援学級でどのような授業を受けているのか、どのよう

な支援をすれば S が自分で活動できるのか等、周囲の児童が S とのこれまでの関わりでは知り得なかったことを知る機会となった。

- 実践前(4月)は、顔の輪郭は描くが、顔の各パーツの出現はみられなかった。本実践(7月)では、ポスター制作において、『絵描き歌』を視聴しながら顔の各パーツを描けるようになった。完成したポスターは、Sが描いた下絵を活かした作品になった。夏休み明け(9月)に、教員がその場で『絵描き歌』を歌ってみると、7月同様に、各パーツがほとんど再現された。さらに、一人で描かせてみると、Sは自分で歌を口ずさみながら描き、4月のSの絵に比較すると、顔らしいものとなっていたことから、持続的な効果が認められた(図2)。

4. その後の取組と今後の展望

2学期11月、2年生が各自考えた遊び『おもちゃランド』に1年生を招待した。その際、Sと一緒に遊んだ1年生にプレゼントのメダルを渡した。メダルには、Sがニコニコの顔を描いた。もらった1年生からは、「Sちゃんが描いたの?!」と、驚く声も聞かれた(写真2)。



写真2 自分で描いたニコニコ顔のメダルを渡す S

今後は、身体やSの好きなものを『絵描き歌』の題材にして、Sが楽しく絵を描ける支援を継続していくとともに他の学習への応用も検討していきたい。

参考文献

勝井まどか, 下村勉, 須曾野仁志 (2015) 特別支援学級在籍児童のショートムービー制作による学習効果, 第41回全日本教育工学研究協議会全国大会論文集, pp.162-163



図2 Sが描いた絵の変遷